

豆の木工房 編集

地獄からの生還

ガダルカナル戦 かく生き抜く

櫻井甚作 著・挿画

中華人民共和国

日本

小笠原諸島

又良島
母島

筑前島

台北

台湾

沖縄島

香港

マリアナ諸島

サイパン島
テニアン島
グアム島

カロリン諸島

パラオ諸島

ミンダナオ島

メラネシア

ニューアイルランド島

ビスマルク諸島

バウア

ニューギニア

ポートモレスビー

オーストラリア

メルボルン

タスマニア島

太平洋

北回帰線

マーシャル諸島

トラック諸島
ミク
ボナヘ島

ネニウ

マキン島
タラワ島
ギルバート諸島

ミクロネシア連邦

赤道

ブーゲンビル島

ショアズール島

サンタイサベル島

ペラウ島

マライタ島

ベラウ島

ガダルカナル島

サンタリスタバル島

ソロモン諸島

アンタクルーズ諸島

フィジー

ニューヘブリディズ諸島

フィジー諸島

ロイヤルティ諸島

ニューカレドニア島

トンガ諸島

南回帰線

オセアニア

タスマン海

北島

ウェリントン

ニュージーランド

南島

日付変更線

ミッドウェー島

ハワイ諸島

ハワイ

ネ

シ

プ

サモア諸島

まえがき

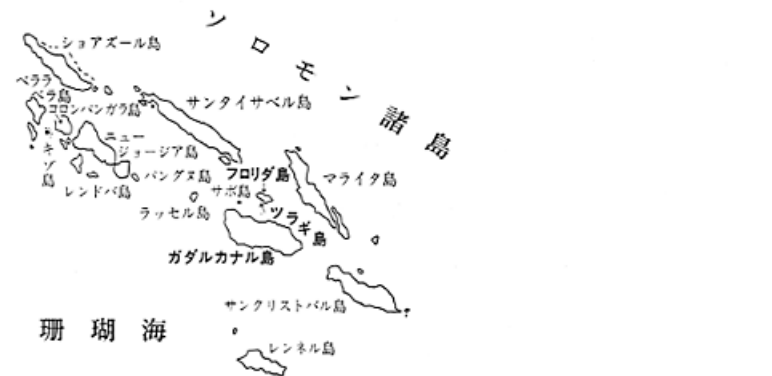
私は大正十年（一九二一年）生まれの酉歳、今年六月満七十七歳になりました。私と同世代の多くの人たちは、いまから五十七年前の第二次世界大戦にはじまった大東亜戦争―太平洋戦争の犠牲となり、内地、外地の別なく、生と死の境を身を以て体験された方が多いと思います。

じつは私もその一人なのです。真珠湾攻撃の成功も東の間、ミッドウェー海戦の敗北により、米軍のガダルカナル島反撃がはじまり、日米の死闘が繰り返されましたが、ついに日本軍は、全滅にちかい大打撃を受けました。九死に一生を得た私は、間近に多くの戦友の死に直面し、こうして自分自身が生き延びることが、何とも不思議でなりませんでした。

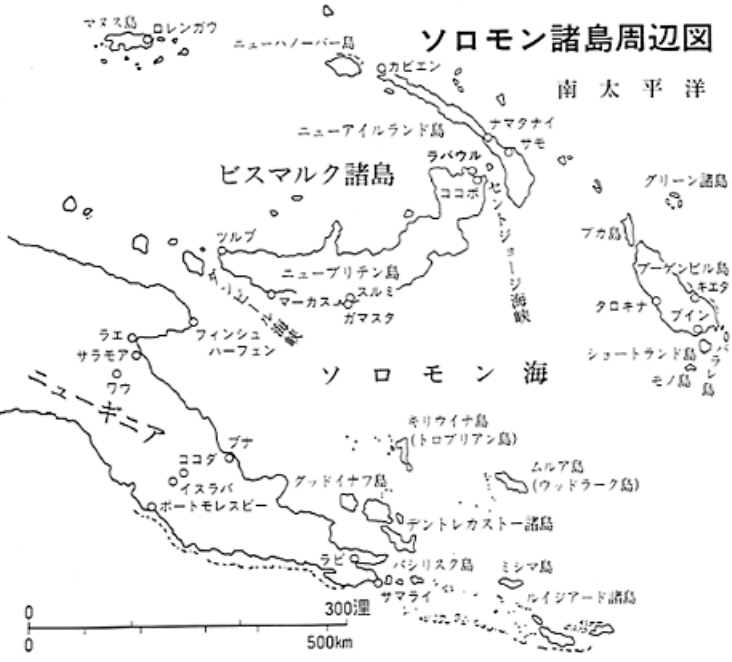
つたない筆で綴ったこの手記は、当時横浜海軍航空隊工作兵であった私のガダルカナル敗戦記録です。いわば一個人の、それもしがたい一兵士の私が実際に体験見分したものを、すでに忘れかけていた記憶の中から、一つ一つ拾い出したものですから、記述に多少の相違や、正確さに欠けるところもあるつかと思います。二度とあってはならない戦争の隠れた裏面史としてお読みいただければ幸せに存じます。

横浜海軍航空隊 フェザーストン捕虜収容所の英霊に捧ぐ。

運命の糸



ソロモン諸島周辺図



その頃の戦局は

- 一九四〇年 (昭和十五年)
 - 九月 二日日独伊三国同盟調印。
- 一九四一年 (昭和十六年)
 - 六月二十二日独軍ソ連 (ソビエト) に侵入、独ソ戦勃発。
 - 十二月 一日 御前会議、対米英蘭開戦を決定。
 - 八日 真珠湾攻撃。太平洋戦争勃発。
- 一九四二年 (昭和十七年)
 - 一月 日本軍、マニラ占領。マレーのクアラルンプール占領。シンガポール占領。ビルマのタボイ占領。ニューブリテン島ラバウル占領。ボルネオのバリクパパン占領。ビルマのモルメルメン占領。
 - 二月 セレベス島マカッサル占領。シンガポール陥落。英軍無条件降伏。チモール島占領。
 - 三月 ランゲーン占領。ニューギニアのラエとサラモア占領。ジャワ島蘭印軍無条件降伏。クリスマス島占領。
 - 五月 ビルマのマンダレー占領。
 - 三日 ソロモン諸島のツラギ島、タナンボコ島、ガブツ島に日本軍上陸。ビルマのバーモ占領。ビルマ・中国国境竜陵を占領。コレヒドール島占領。
 - 六月五日 ミッドウェー海戦で、日本軍連合艦隊大敗。
 - アッツ島占領。キスカ占領。
 - 十六日 海軍設営隊、ガダルカナル島飛行場建設作業を開始。

横浜海軍航空隊入隊

一九四一年(昭和十六年)五月、二十歳になった私は家族や友人たちの歓呼の聲に送られ、志願兵として横須賀海兵団に入団した。この年の十二月、太平洋戦争が勃発した。

「このため海軍工作学校を八か月で繰り上げ修了して実施部隊、横浜海軍航空隊へ通称「浜空」に同僚の長谷川昌三とともに配属された。主に九七式大艇と二式水上戦闘機の部隊だった。

その頃、浜空の本隊は「ユギア」の北東「ニューブリテン島」のラバウルにいた。翌年、昭和十七年四月か六月、私は残留部隊にこのるはずだったが、ラバウルへ赴くことになっていた長谷川が急性盲腸炎のためかで行けなくなり、かわって私が本隊へ送られることになった。入隊後わずか二週間たらずのことだった。

部隊名は「ウー〇五・五三部隊」「ウのト下マル」と読みラバウルを表し、「オサン」は横浜航空隊を表す記号だ。「」の交替が運不運の岐かれ目となる最初だった。

当時、私の家には電話がなかったので、裏の酒屋へ電話して家のものを呼び出してもらった。行く先は秘密にしなければならず、急いでいたので出てくれた「番目の姉」に、現在の「R桜木町駅を待ち合わせ場所に指定して電話を切った。

がこの時はとうとう会えず、飛行機でサイパン経由ラバウルへ私一人が送られた。あとからの手紙で分かったことだが、父、姉二人と弟が横浜駅で待っていたというのだ。来てくれた家族の一人ひとり、別れのことばのひとつでも言ってお発したかったのだが、なんとも歯切れの悪い発ち方をしてきてしまったと、虫の知らせと「いつかいつまでも悔やまれてならなかった。

私は工作兵で飛行機などの修理をする兵隊だったが、溶接専修を修了したばかりの新米、修理をするには熟練が必要で、新兵の私などには溶接器などさわることさえできなかった。

隊には若い兵隊がいなかったので、私は士官の従兵をせよといつことになった。士官室には大尉の分隊長と星野萬吉軍医長の二人がおり、食事、洗濯、伝令などの世話をさせられた。まだその頃は、一通りの用事がすめばあとは呑気なもだった。

ツラギ島、タナンボコ島、ガブツ島

日本から南東およそ六千キロの南太平洋上に、約二五〇〇キロメートルにわたって二条に伸びる大小様々な島々がソロモン諸島である。

主な島には、ブーゲンビル、ガダルカナル、シリアール、ニュージョージア、サントアイセル、マライタ、サンクリストバル、サンタクルス諸島などがある。これらのうち一番大きな島がガダルカナルである。

ガダルカナルから四十二、三キロ先にツラギ島があり、このツラギ島から約三キロ離れたところに、現地人も住まない離れ小島のタナンボコとガブツがあった。

この二つの小島は、日本軍がオーストラリアの沿岸警備隊を追いついたあと、軍の最前線として横浜海軍航空隊の水上飛行機着基地となりこの周辺をツラギ基地と呼んだ。

ツラギ進出

ラバウルには一カ月たらずで、「浜空」の主力はガダルカナルと指呼の間にある対岸のツラギ島へ進出することになった。

貨物船の前後に機銃を乗せた特務艦「最上川丸」は京城丸、吾妻山丸とともに出港した。護衛の駆潜艇二隻の間を通過したとおもつと、ガダルカナル島が見えるザボ島沖で突如、ドカンと一発、大爆発音におどろいて飛び起きた。上甲板に出たときには二番艦の京城丸は既に右に傾きかけていた。これまでも潜水艦に気をつけて蛇行を重ねてきたのに、しかも目的の地ツラギは目と鼻のさきというところで、敵の魚雷にやられ海の藻くすくす消えて行くとは。実戦未経験の私には、不吉な予感があたってしまったような気持ちで大きなショックだったが、これが最初の試練となった。

私の動揺をさらにおおるかのようになり、艦は激しく蛇行に蛇行をかさねながらやっとツラギ島近くの小さな離れ島、ガブツ島、棧橋へ六月下旬に着いた。

早々に荷揚げを急いだ。器材、将校の荷物、爆弾、飛行機用燃料も二、三日かかって船から降ろした。

